

ジェヴォンズの歴史的方法

——歴史学派の影響——

Jevons's Historical Method: The Influence of the Historical School

阿 部 秀 二 郎
Abe, Shujiro

ABSTRACT

It has been said that there were two contributions of Jevons - the development of mathematical and deductive theory, and of statistical and inductive method. This paper will consider the latter in the light of the historical school. Leslie, the father of the English historical school, was influenced by Henry Sumner Maine, the father of the English historical jurisprudence. Jevons was also influenced by Maine in one way or other. This paper will finally suggest the implication between two contributions, given Maine's influence on the history of scientific jurisprudence.

はじめに

ピアソンは、『法と経済学の起源』において、次のように述べる。限界革命において自然法の名残をとどめる「価値」から社会現象としての「価格」へとメンガー、ワルラス、ジェヴォンズの興味関心が移行する中で、メンガーとワルラスは私的所有権に関する歴史的認識の変化を指摘したが、ジェヴォンズは明確化しなかった。明確化しない理由は、ジェヴォンズの若くして死んだことにあり、死後に出版された『経済学原理』の第50章では「所有権の源」というタイトルで何らかの記述がなされる予定であったことが指摘されている。(Pearson [1997] pp.31-2)

限界革命と所有権についてのピアソンの評価についてはさておき、「所有権」

という概念、またその「源」についての歴史的分析は、法学的知識及び歴史的知識へのジェヴォンズの関心または経済学の方角性に対するジェヴォンズの認識について、興味をそそられる。ドイツ歴史学派からイギリス歴史学派への影響さらに、イギリス歴史学派のクリス・レズリーとジェヴォンズとの関係は、不完全ながらも分析してきた。(阿部 [2005a], 阿部 [2005b], 阿部 [2006])

本論文の目的は、歴史学派からのジェヴォンズへの影響について継続して分析すること、その分析の過程において法学的知識へのジェヴォンズの関心または経済学の方角性に対するジェヴォンズの認識について分析することにある。

I. では、ジェヴォンズの何冊かの著書を分析することで、歴史学派による歴史的方法または帰納的方法についてのジェヴォンズのスタンスを見る。II. では、第1章を踏まえたうえで、ジェヴォンズに影響を与えたイギリス歴史学派のメインの影響と自然科学者ハーシェルの影響を分析する。III. では、歴史的知識と法学的知識についての当時の関連を考察することで、ジェヴォンズの経済学についての考え方を深める。

I. 歴史的方法とジェヴォンズ

I-1. 『経済学の理論』初版と第2版

ジェヴォンズが『経済学の理論』の第2版(1879年)に与えた序文は、初版(1871年)に与えた序文よりもかなり長い。その理由は、ジェヴォンズの第2版の序文の次の言葉に端的に表現されている。

「破砕された一科学の断片を拾い上げ、新たに発足することは、尋常ならざる仕事である。しかしそれは、多少とも経済科学の進歩を見んと欲する人々の回避してはならない仕事なのである。」(Jevons [1888] p.1, 訳xlv 頁)

当時のイギリス経済学の中では、賃金決定理論としてリカードウ、ミルの賃金基金説が支配的であった。これに対してジェヴォンズは初版で、その理論が疑惑的であり、需要供給法則によって賃金が支配されていることを、萌芽的に

論じた。しかし第2版が出版されるまでの8年が経過したにも関わらず、賃金基金説という謬見は払拭されていないばかりか、資本家の生産動機に目を向け、代替費用の考え方を展開することで、分配理論が一貫して説明できるという可能性が、阻害されているというジェヴォンズの認識が存在した。

ジェヴォンズは、初版が出版されてから海外の先行文献を渉猟することで、当時の既存の賃金論への疑惑は確信となったが、他面では自らの賃金論の独創性の認識は失われていくことになった。つまり大陸の経済学では数学的理論が存分に展開されており、賃金理論において賃金基金説が展開されていないことが理解されてくるに伴い、イギリスの経済学の後進性に警鐘を鳴らす必要性をジェヴォンズが認識したのである。さらに、イギリス経済学の後進性は、他国の経済学との比較においてだけではなく、イギリス国内の自然科学との比較においても、顕著であるという認識をジェヴォンズは有していた⁽¹⁾。

後進性に関するジェヴォンズの認識と関連するのは、イギリスに展開しつつあった歴史学派の趨勢である。賃金基金説との関係では、実証的な点から批判したのは歴史学派のクリフ・レズリーであり、ジェヴォンズはその批判を高く評価していたし⁽²⁾、自然科学との関連で言えば、科学の進化に対して歴史的知識の重要性をジェヴォンズはやはり深く認識していたと指摘できる。それは、次の初版と第2版との比較からも推測されよう。

初版第1章の「論理的方法」というタイトルの節で引き合いに出された歴史的方法論を採用する経済学者は、ただリチャード・ジョーンズだけである。さらに、ジョーンズの方法は歴史的方法ではなく、帰納的方法と認識され、「事実の収集とその分類によって経済学は進展しない」と一言触れられているだけである。(Jevons [1871] p.24)

これに対して、第2版の序文では、1876年以降展開されたクリフ・レズリー

(1) British Association の F 部会の会長就任講演で、ジェヴォンズは自然科学者の社会科学者に対して有している優越感を批判的に捉えている。(Jevons [1870] p.25) 当時のイギリス経済学のおかれた危機について、上宮 [2000] のⅡでも指摘している。

(2) 阿部 [2006] 参照。

をはじめとするリカードウ経済学批判が指摘され、第2版の同じ節では、ジョーンズに加え、「ド・ラヴレエ (De Laveleye), ラヴェルニュ (Lavergne), クリフ・レズリー (Cliffe Leslie), サー・ヘンリー・メイン (Sir Henry Maine), ソーロルド・ロジャース (Thorold Rogers)」の名前が引き合いに出され、カオス状態にある経済学が救われるためには、細分化を図り、「経済社会学」を構築する必要があるとジェヴォンズは指摘している。(Jevons[1888]p.20 訳16頁)したがって歴史的方法は、経済学にとって必要な存在であると積極的に評価されることになった。

I-2. 「経済学の将来」

レズリーが書いた論文「経済学における哲学的方法について」⁽³⁾が *Hermathena* 誌に掲載された同じ1876年に、経済学クラブでアダムスミス『国富論』出版100周年を祝う夕食会が開催され、ジェヴォンズとレズリーは同席した。

この夕食会に出席したロウによるイギリス経済学でなすべき仕事はほぼ存在せず、19世紀にして完成した旨の発言に対して、ジェヴォンズは衝撃を受け、この見解に対して詳細な批判を叙述しているのが、「経済学の将来」と題される講演である。この講演の内容を見ていくことで、1876年という歴史的な時間における歴史的知識や歴史的方法の当時の社会科学への影響の大きさと、ジェヴォンズへの影響の大きさを把握することができる。

ジェヴォンズは、まずロウに対する批判として、1) 既存のリカードウ・ミル学説への対抗の趨勢、2) イギリス経済学とは独立の過程で発展する外国の経済学を挙げ、バジヨットなどの見解と同様に、当時の経済学のカオス状態を指摘する。

次に、リカードウ・ミル学説への敵手として、スミス経済学の演繹的な方法の正当性を問題視し、歴史的考古学的な方法が演繹的な方法にとって替わらな

(3) Leslie [1876]

ければならないと主張する急進的な動きが台頭してきていることをジェヴォンズは指摘する。さらにその動きはドイツ歴史学派によって、経済学だけではなくさまざまな社会科学へと展開していることを、やはり記念夕食会に同席していたベルギーの経済学者ラブレーの叙述を引き合いに出して、説明する。そしてイギリスにおけるその代表格としてジェヴォンズはレズリーを挙げる。⁽⁴⁾

ジェヴォンズがこのような歴史的方法を、「不可欠」と考える。さらにレズリーの研究ほど興味深い主題はなかなか見いだせないと指摘するが、歴史的な経済学が抽象理論を破壊したり、それに代替する点において、レズリーと相違することを指摘する。その背景に存在しているのが、科学的方法論であり、同時に科学の進化に対するジェヴォンズの考え方である。

ジェヴォンズは、スミスの方法が演繹的推論と経験による検証とが結びついた「完全な帰納法」であると指摘するが、この「完全な帰納法」こそミルの具体的演繹法（Jevons [1888] p.17 訳 14 頁）であり、後のケインズも継承する科学的方法論が実質的に完成するのである。ジェヴォンズが完成させたと指摘する理由は、「演繹」と「帰納」という言葉についての混乱がもたらす弊害として「排除性の誤謬」⁽⁵⁾を指摘し、実際には「演繹」と「帰納」とは対立し互いに排除するのではなく、「演繹」と「帰納」とが方法論として不可欠な要素を構成することを明確にしたからである。つまり歴史・統計という帰納と抽象的な演繹とは、互いを排除するのではなく、共存することができるし、共存すべきという認識を明確に示したからである。

しかし抽象的な数理経済学を展開するジェヴォンズにとり、台頭してきた歴史的方法を主張する経済学を、自らのそして当時の経済学全体にとり敵手とし

(4) ジェヴォンズは、イギリスにおける歴史的・統計的・帰納的な議論を展開した経済学者としてほかに、次のような名前を挙げている。スミス、マルサス、ジョーンズ、サミュエル・ラング、バンフィールド、パートン、ソロルド・ドジャース、ヘンリー・メイン、ジョージ・キャンベル。

(5) ケインズは次のように定義している。「経済学の研究の単一の側面または単一の部門だけが考慮され、それに適合する方法が増強する一方で、適切な位置に立てば等しく重要な他の方法が、無視されたり明確に拒否される。」（Keynes [1986] p.8）

て把握するのではなく、それを必要な要素として内包しなければならないという認識を生じさせたのは、単に論理的な純粋性を求めたという原因以外に、当時台頭してきていた進化論に原因を求めるべきであろう。

II. 歴史的方法と科学的進化

II-1. メインとジェヴォンズ

「経済学の将来」において、完全な帰納法として、歴史・統計という帰納の重要性を認識するジェヴォンズは、当時の法律学と経済学との並行的な展開を紹介することで、演繹的方法と帰納的方法との分業関係を指摘する。

イギリス歴史学派のレズリーは、自らの歴史的方法への影響をイギリス歴史法学派のメインから受け継いだことを、『経済学随筆』の初版序文において、ミルと自らを比較することで、次のように述べる。⁽⁶⁾

「……政治と倫理に関する諸問題についてのミル氏と著者（レズリー）との扱い方の違い（例えば倫理の功利主義理論や利潤理論や物価理論との関係における）は、次のような事実に戻元できると信じている。ミル氏は若いころにオースティン氏に講義に出席したのに対して、著者はミドルテンプルでヘンリー・メイン氏の講義に出席し、考察の歴史的方法から最初に学ぶことができ、その後古代法……などの著作へと展開した。」
(Leslie [1876] p.vi)⁽⁷⁾

すでに1876年に、以上のようなメインとレズリーとの関係をジェヴォンズが把握していたかについては、現在のところは不明である。しかしジェヴォンズは法律学におけるメインと経済学におけるレズリーとの親近性を把握している。ラブレー、ラヴェルニュといった大陸の経済学者にレズリーを含めた歴史

(6) 阿部 [2005b] は、イギリス歴史法学へのドイツ歴史法学の影響について指摘したが、イギリス歴史学派のレズリーへのメインの影響については明確にしていなかった。またメインへのジョーンズのなどのイギリス帰納法の影響についても完全に把握できてはいないので、さらなる考察は必要である。

(7) Leslie [1888] p.x も参照。

的な方法を採用する経済学者を、法律学における同様の歴史的な方法を採用したメインと比較して引き合いに出す。(Jevons [1876] p.195)

しかしジェヴォンズは、メインは「排除性の誤謬」を犯してはいないと想定している。

「ヘンリー・メイン卿は、法律の源や展開を考察することは、どんな人の法律学の理解にとっても基本であることを結論として示すのだが、次のようにはならないし、ヘンリー・メイン卿もそのように断言していない⁽⁸⁾と考える。それは、オースティン氏がこの大学で与えたものの⁽⁸⁾ような、法律学の抽象的で合理的な計画が、正しくないとか有益ではないという、ことである。」(Jevons [1876] p.196)

分析法学者として有名なオースティンそしてオースティンに影響を与えたとされるベンサム、さらにはホップズらの、抽象的合理的な法学と歴史的分析の関係について、メインは『初期制度史講義』の最後の2章(「主権」、「主権と帝国」)で展開しており、ジェヴォンズは、それらから引用にあるような推論を導き出している。この2章について概要をまとめておこう。

まず、時代背景として押さえておく必要があるのは、経済学同様法律学においても、合理的抽象的な方法と歴史的な方法とが対立していたという事実である。

「1840年代中頃までには、法思想に二つの相対立する学派の存在が一般に認められる。歴史法学派と分析法学派の二つで、後者は功利主義的な法典編纂者から構成されていた。」(Stein [1980] p. 訳 89 頁)⁽⁹⁾

メインは新しい法思想の導入の必要性を肯定したうえで、イギリスには以下

(8) ジェヴォンズの講演は、ユニバーシティ・カレッジ・ロンドンでなされたものであり、オースティンは1826～32年まで同大学の法理学教授を務めた。(Rumble [1985] pp.28-35, 229)

(9) 分析法学派は次のように特徴をまとめることができる。裁判官の判例を重視した慣習法に重きを置くのではなく、「最大多数の最大幸福」原理に基づいた立法者による成分法に従うべきであるというベンサムの立法計画に基づき、オースティンが抽象的で合理的な法理論を普及させた。他方で、歴史法学派はドイツ歴史学派の影響を受け、英国法の歴史的性格を重要視したパーク、レディ、ヘイワードなどが挙げられる。

の2つの有利な点があると指摘する。1) イギリス固有の法体系を有し続けていて、大陸の諸法と比較することで多くの知識を獲得できる余裕があること、2) ベンサムやオースティンの分析法学の発展。そしてホッブズとともに科学的な法学を展開するオースティンの方法を評価したうえで、立法する主体としての「主権」概念についてのオースティンの抽象化について、メインは問題視する。通常の科学的な方法において抽象化は重要である。しかし、数学や経済学と比べて、法学の場合抽象により排除された要素も重要である。したがって「主権」についてアプリオリに、規定してしまうことは、主権に止まらず、成文法の根拠をも薄弱とさせてしまうことになる。(Maine [1914] pp.342-3, 358-62)

ジェヴォンズが指摘するように、メインの考察はベンサム及びオースティンの法律学としての体系性を展開する上での概念化の重要性についての問題であり、自らの歴史法学がベンサム及びオースティンの方法を排除するものとは位置づけられない。

したがって歴史的な分析や考察を重視する点で、メインは歴史学派のレズリーに近いのだが、方法論の上では、歴史的帰納的な分析で抽象的な理論を否定しないという点で、さらに両者の共生による進展を求める点で、ジェヴォンズの方法論と近いとも読むことができる。

II-2. 科学と進化

ジェヴォンズの経済学に関係する研究は、1851年の統計(census)から出発している。そして1865年には『石炭問題』を出版している。このように自然科学と社会科学とが統計を用いた「科学」という側面で、ジェヴォンズの研究は進行していくのだが、この「科学」観について、『経済学原理』の第21章を見ていこう。まず第21章の位置づけについて触れておこう。第21章は、第18章「労働」……第23章「職業の分類」という労働・生産について一連の説明が展開されている中に存在している。そしてジェヴォンズが経済学の基礎的

な教科書として記した『経済学』(Political Economy)でも、同様な位置づけがなされている。⁽¹⁰⁾

阿部 [1998] で示したように、ジェヴォンズの生産概念は 1860 年代の労働問題そして労働者教育と関連している。当時科学技術や経済が発展する一方で、それらに対立する社会問題、貧困問題などが存在していた。1866 年の「経済学の知識を広める重要性」というパンフレットでは、その後の知識と教育の重要性とに関連するジェヴォンズの指摘がすでになされていると言ってよい。上層階級による立法などの様々な手段により、労働者が結果的に不利益を被るのではなく、「労働者が知性と教育とを持つこと」によって、真の自由な労働者になれるという主張は、1869 年のマンチェスター統計協会での講演「時代と関係する協会の役割」における次のような考え方と関連している。

不況による貧困の増大を指摘し、その原因として 500 年間に於ける悪法また無法をジェヴォンズは挙げる。しかし容易には貧困は解決できないのであり、人々の知性と先見性を涵養する方法による以外にないとジェヴォンズは指摘する。さらに翌 70 年になされた講演により 69 年の講演はより明確に把握されるのだが、教育の欠落と富裕層の間違った博愛により、貧困が進化していることが説明されている。(Jevons [1965] pp.186, 197)⁽¹¹⁾

さらに『経済学』では、経済学が貧困を救済し、労働に対してどのように報酬を増加させるかについて教授する目的をもつと提起されている。(p.7)

労働者が報酬を増加させるだけではなく、社会全体の生産性増大のためにも必要な「科学の知識」について、ジェヴォンズは『経済学原理』で次のようにまとめる。

科学（正確で一般的な知識）には、書きとめることのできる知識と書きとめることのできない知識との 2 種類が存在する。技術も書きとめることのできな

(10) 第 3 章の「富の生産」の第 24 節「科学の必要」という項目の中で展開されている。(Jevons [1919] pp.31-32)

(11) この論文では、さらに都市の不衛生さと自殺の問題も統計的に扱われている。

いものであり、書きとめることのできない知識と技術とは、したがって増加させることはできない。しかし、次のようなハーシェルが指摘する科学による利益があるのだから、科学を生み出す好条件として、寄付や報酬や特許や社会的名声などのインセンティブを考慮する必要があるとしている。⁽¹²⁾

科学の第一の利益は、実現不可能なことを試みることから解放されること。第二の利益は、実現可能なことを、不適切なまたは反対の試みによる間違いから解放されること。第三の利益は、目的へ、容易で短時間で効率的に到達できること。第四の利益は、知識がなければ行おうとも思わなかったことを試みたり、実行可能にすること。⁽¹³⁾

「科学の知識」とともに、ジェヴォンズが重要視している生産性増大の要素は、「分業」である。この「分業」はスミスが主張した概念であるが、スペンサーの「労働の分化(differentiation of labor)」と一致するとジェヴォンズは指摘する。ジェヴォンズによれば、「同質性是不安定であり、分化していくことになる。そしてそれゆえ、人間の制度や特徴が多様化する」(Jevons [1877] pp.761-2) というスペンサーの進化概念に従い、職業が専門化されていくことになり、労働者は自らの得意とする職業に適合していくことになるのである。(Jevons [1876] p.99)⁽¹⁴⁾

そして、この職業の専門化に伴う分化は、経済学においても同様であり、人間本性について普遍的抽象的な理論が展開される部分と、それらの理論が歴史

(12) したがって科学的知識としてのインフラストラクチャーとしての性格をジェヴォンズは認識しているのであり、同時に「消費の非競合性」についても認識している。「セイは知識が、使用によってほとんど消費されないといったが、より適切にこう言ってよい。知識は全く消費されない。」(Jevons [1965] p.97)

(13) 第一の利益として、ジェヴォンズは経済学における事例を挙げる。具体的には、フランスのアシニア紙幣 (Jevons [1875] p.246) のような利子生み貨幣発行などが不可能であることが理解されていることを指摘している。第二の利益として、ジェヴォンズは次の事例を挙げる。製鉄作業において、送る風の温度が高くなるほどよいという知識を得ることで、生産性が向上した事例である。第三の事例では、リンネルの漂白時間が、塩素や弱酸などの適用で次第に短縮されてきたことが指摘される。第四の事例では、動力源としての電力の利用の利益が挙げられている。

的に検証される部分の両方が必要であることをジェヴォンズは「経済学の将来」で次のように指摘する。

「分業の利益は、労働においてと同様に知識を追求する上でも、大きくかつ不可欠である。そして経済学だけがこれらの利益を利用できていないことは問題外である。スペンサー氏が言おうとしたように、分化は、進まなければならない。」(Jevons [1876] p.197)

ジェヴォンズの、経済学が自然科学以外にも他の諸科学の支援を受けているという指摘は、1875-6年にかけて、オウエンズカレッジで行われた講義において、ジェヴォンズは、道徳科学の分類でも見いだせる⁽¹⁵⁾。

- 「＜道徳哲学＞、これは人間の特徴とその特徴に基づく行為の結果を扱う。
- ＜法律学＞、定義するのは困難だが、権利の公平性を扱う。
- ＜政治哲学＞、これは国家権力の分配を扱う。
- ＜衛生学＞、これは長生きについて扱う。

✓ (14) しかし『経済学』では専門化は流動的な雇用に対応する上でのデメリットももたらす可能性があることも指摘する。そのデメリットを少しでも緩和させるためには、労働者の職業移動の自由（新規参入の自由）が確保されなければならないという論理を有する（Jevons [1919] pp.37-42）。さらに実際に多様な職業分類が存在することが明白であり、それらについてジェヴォンズが分析を始めた50年代から、十分な統計が70年代に至ってもなされていない問題点をジェヴォンズは指摘する。

(15) すでに1869年にマンチェスターで行った労働者向けの講演で、次のように述べられている。刑法が含まれているか否かを除き、ジェヴォンズの諸科学の考え方は踏襲されていると言ってよい。

「道徳哲学は、相互の義務や責任の土台そしてその特徴の結果や一般的な善に対する作用を考察する。法律学は、人間の明確で重要な権利と義務が法に内包されていることや共同体や国家の統合した権力によって発揮されることを示す。国際法は諸国家の活動を互いに導く道徳的なルールの体系を含む。政治哲学は法律が策定され施行される権力を扱う。……社会科学協会の会合で扱われるような、社会統計科学は、科学とは言えない、……事実の寄せ集めである。衛生学は社会科学の一分野である。結局国家の行政は、常に様々な科学の結果によって導かれているが、技術であり、それも困難な技術であり、抽象的な原理はただそれだけで支配することは認められず、その時代の全ての事情、大衆の意見、国家と外国との関係、貿易の状態などに対して斟酌が与えられることになる。」(PC.VII,p.55)

＜刑法＞，これは犯罪の罰と抑制を扱う。

膨大なく統計＞または＜社会＞科学。社会に言及するすべてがこの名目
の下で議論される。」(PC.VI, [1977] p.8)

Ⅲ. 歴史的方法と法律学

Ⅲ-1. 実験的方法

ジェヴォンズの父トーマスには、『刑法論評』(1834 年) という法律に関する書物がある。そしてその書では、当時の法律の混乱した状況についての問題関心が触れられている。(Jevons [1834] p.5) さらにジェヴォンズのいとこのアルフレッドは法律家であり、法曹教育改革運動として一時期有名になったリバプールムーブメントの火付け役であった。(LAW TIMES [1868] p.398) 彼もまた当時のイギリス法曹界の問題点を追求しようとした。

Ⅱ-1. でレズリーの歴史的方法を通じて、メインとジェヴォンズとの方法について触れた。ベンサム、オースティンの合理的法律改正運動やジェヴォンズの父そしていとこの法律学との関係を有していた。ジェヴォンズの法律学に対する考え方を分析しよう。

ジェヴォンズは 1880 年に「実験立法とアルコール法 (Experimental Legislation and the Drink Traffic)」と 1882 年に『国家と労働との関係』を記し、法に関して叙述している。前者の問題関心は、「実験」という自然科学的な手法の社会科学への適用についてであり、後者の問題関心は、政府が「自由」(労働者の自由行動、労働者と雇用者との自由契約) にどの程度まで介入するべきか、法を与えるべきかについてである。本稿では、概念的な問題についてもより広く考察している後者を中心に見ていく。

主としてジェヴォンズは、法律学 (jurisprudence) ではなく立法 (legislature) に関連して展開しているが、次のような叙述から、自然法思想を否定していることが理解される。

「まず排除しなければならないのは、社会事象において次のようなものが

存在するという考え方である。抽象的な権利、絶対的な原理、破棄し得ない法、変えられないルール、いかなる普遍的で固定的な性質のもの。」

(Jevons [1910] p.6)

次に、ベンサム、オースティンとの距離で言えば、ジェヴォンズは彼らの法実証主義からも距離を置いていることが次のような叙述から理解できる。

「法 (law) は、一連の恣意的な規則、何世紀にも渡り蓄積されたり変化してきたもの、人々が互いに社会においてよく生活する条件を定義したものである。」 (Jevons [1910] p.7)

このように法の形成過程における歴史の存在を認識し、それを理解するという方法はメインの方法のジェヴォンズへの影響を感じさせる。

具体的にジェヴォンズは、法の歴史的蓄積を裏付けるために、反トラック法が⁽¹⁶⁾適用される業種に差があることの正当性や、法令集における所有権の不可侵性の変化の指摘がなされる。

さらにジェヴォンズは以下のようにコモンローを否定的には位置づけてはいない。立法は科学ではなく、経済学における経済政策と同一のものであって、その政策形成過程において原理は可視化できないのと同様に、立法原理も可視化できないのであり、確認できるものはその過程に基づき成立した「記載」(register)であると指摘する。その例として、親権についてのコモンローの原理は、子に対する親の強力な愛情が子を育成する上での最善の保証になるという信念の「記載」ということになる。

しかしその歴史的な法の限界について、ジェヴォンズは問題視する。社会の大きな変化という時代背景を取り上げ、「記載」された原理が時代的な制約を伴うものである場合に、法自体も廃棄される可能性を有すると指摘する。こうして過去の歴史に依存できない事情が顕在化してきている状況において、ジェ

(16) Truck Act は、賃金を現物形態で支給したり、生産手段の賃借りや購入を強制したり、不用品の購入を強制したり、支給側が売店を営営し、商品券発行で商品を購入させたり、するなどの、労働者収奪の側面もあるが、工場や作業場が遠隔地にあるために、住居などを斡旋する方法で対応せざるを得ないという側面を有する者もあった。(武居 [1980])

ヴォンズが求めるのがバイコン的立法である。

「利用できるもっとも近接したそして類似した経験からの推論により……
進んでいくこと」(Jevons [1910] p.24)

ジェヴォンズは、適切なバイコン的方法の利用として、ニューマーチが1861年に British Association で行った講演を利用し、統計学などをはじめとする科学の利用を推奨する。そしてこれらの科学を利用する立法者の資質として、自然科学・社会科学にバランス注意を向けられることを指摘する。もし科学者であれば、自らの専門化している内容にのみ配慮することで、他の領域への配慮が欠落してしまうからという理由であった。つまりⅡ-2. で指摘した専門化による協業が、法の世界でも必要であるというスタンスが保たれることになる。

Ⅲ-2. バイコンの評価

Ⅲ-1. で見たように、ジェヴォンズは、バイコンの実験的方法を立法に適用することを推奨している。またⅠから見てきたように、ジェヴォンズの経済学したがってジェヴォンズが期待する将来の経済学を支える統計的・帰納的作業において当然、バイコンは評価されてしかるべきであるが、ジェヴォンズの評価は高くない。原因は次の引用で示されているようにバイコンの帰納的な方法の不完全性にある。

「バイコンの方法についての考え方は、ある種の科学的簿記 (bookkeeping) であった。事実は無差別にあらゆるところから集められ、元帳に含められる、そこからやがて真理の収支が現れる。偉大な発見にあまり到達しそうでない方法を想像するのに困難はいらないだろう。事実が多く集まるほど、それが内包する自然の法則を、いかなる分類体系によっても、明らかにする可能性は低くなる。……卓越した能力の前に、事実がその意味を表し、論理的な秩序に入り込む必要がある。……自然科学者の想像力が作用して、説明されない事実が互いに、そしてこれまでの一般的な事実と関連付けられるような、多数の関係を見出すことになる。」

(Jevons [1877] pp.576-7)

こうして、ペイコンは事実の収集とその配置においては素晴らしい能力を有したが、それらの事実から抽象的な推論に基づいて、諸事実から法則性を推論する能力が欠落しているとジェヴォンズは批判している。

ハーシェルが苦言を呈した (PC. III [1977] p.78) したように、ジェヴォンズのペイコンの評価は当時のイギリスでは一般的ではなかったようだが、ジェヴォンズがこのような評価を下す背景には、ドイツ人の自然科学者リービッヒによるベンサム批判の影響が存在する。

ジェヴォンズが読んだリービッヒのペイコン批判は、「*Historia Naturalis*」を主とする自然科学方法論史に関するペイコンの著書を詳細に分析し、その方法論の不完全性を明らかにするものであった。例えば上のジェヴォンズの叙述と密接に関連する部分を下に引用しよう。

「あらゆる考察において、ペイコンは実験に価値を置いた。しかしながら、ペイコンはその意味をまったく理解してなかった。実験は一度なされると、そのまま全体にいきわたるある種のメカニズムと考えていた。しかし科学において唯一の考察は演繹であり、＜アプリオリ＞なのである。実験は、数的な操作を通じて、思考または考え方を助けるもの以外のなものでもない。そして思考または考え方は、実験に先立つものである。」

このような不完全な帰納法に対する批判、つまり、事実の収集・資料化だけではなく、適切な抽象的推論を用いるという方法の欠如に対する必要性の認識は、序文に示した『経済学の理論』初版のリチャード・ジョーンズの経済学へのジェヴォンズの評価と関係づけることが可能であろう。

そしてリービッヒによる相対主義的なアプローチで分析した結果、ジェヴォンズが使用する「実験的」方法を、ペイコンはむしろ否定していることが理解される。

「考察の実験的方法はもっとも奇怪で、おかしいものである。狭い土台にたち、個別の実験の漠然とした証拠に立つものだからである。……この

方法を採用しているのが、ギルバートである。」(Liebig [1863] p.263)

ジェヴォンズは、当然これらを認識して、『科学の原理』では推奨すべき実験的科学家として磁力や静電気の発明家としてのギルバートを挙げている。(Jevons [1877] p.571) したがってジェヴォンズは、ギルバートやニュートンを実験的方法の科学家として採用したかったのであろうが、I-2. で指摘したような科学的用語の使用法の混乱が広まっていた事情を考慮すると、それらに対して説明すべき著書は『国家の労働との関係』という政策的なものにはふさわしくなかった可能性がある。

そして重要なのは、イギリス帰納法の父とされるベイコンに対して、リービッヒの分析を借りながら、源流を歴史的にたどり、その限界について把握するという歴史的比較的方法を1877年の『科学の原理』でも展開していたことである。この時点において、やはりジェヴォンズはレズリーそしてメインの薫陶を受けていたと指摘できる。

おわりに

II-2. で記したように、ジェヴォンズは1850年代初頭に、国勢調査の結果を自分なりに分析している。さらにIII-2. で挙げた科学者リービッヒの『化学通信』(Chemische Briefe) は、1852年に読んだとされており、同じころ、ファラデーやハーシェルなどの講義に主席することを楽しみであるとしている。(PC. I [1972] pp.82-7) このように自然科学・数学・統計学などの興味に埋没していた時期は、イギリス歴史法学のメインがドイツ歴史学派のサヴィニーの影響と当時進行していた地質学の影響(阿部 [2005b])のもとで、ローマ法を講義していた時期でもある。さらに、そのメインの講義に、レズリーは学生として出席することで、経済学におけるイギリス歴史学派の隆盛が始めることになる。

レズリーの統計資料を利用した労働運動に関連する論文は、1868年の段階で同じ関心を有するジェヴォンズに高く評価されており、本稿でも指摘したよ

うにスミス『国富論』出版 100 周年記念夕食会でも同席している。またレズリーの死亡記事をジェヴォンズが記している（阿部 [2006]）。

ジェヴォンズは、『経済学の理論』初版（1871 年）では、歴史的帰納的研究の必要性について多くを割いていない。むしろイギリス歴史学派の源流とされるジョーンズを事実の収集に終わっていると批判している。しかし『経済学の理論』第 2 版（1879 年）以降では、歴史的帰納的方法の重要性を認識するようになっている。

この変化の背景について、上に挙げたようにレズリーの歴史的方法の影響を考察し、次にレズリーが影響を受けたメインの影響について分析した。科学における完全方法には演繹的推論と帰納的推論の両方の過程が必要となるのであり、歴史学派は後者において重要なものであると認識されていた。しかし、さらに方法論的要素だけではなく「進化」という概念が、生産理論の分業に基づく専門化以外にも、科学者そして経済学者の専門化へと敷衍されることで、歴史的帰納的学問の重要性がジェヴォンズの中で認識された。

またジェヴォンズはメイン及び当時の法学の状況からどのような影響を受けているのかについて、『国家と労働との関係』を主対象として考察した。功利主義的な立法という面でベンサムには近いが、法実証主義という側面は否定している。その面でメインとの近さが認識できることが理解された。さらにベイコン的な実験立法を考察することで、イギリス帰納法におけるベイコンを始祖とする考え方からジェヴォンズ自身が距離を置こうとしており、この分析もレズリー・メインの歴史的方法に依存すると理解することができた。

「はじめに」でピアソンの言葉を引用したが、ジェヴォンズは「所有権の源」で何を言おうとしたのかについて、更に分析を加えて推論する可能性が近くなったと言える。予定されていた「所有権の源」の前には、「土地所有」が位置づけられている。ここからやはりレズリーらの土地所有制度に関する歴史的な分析が、経済学的な目的のもとに叙述される予定であったのであろう。

近年、モッセルマンによるジェヴォンズの多様な領域への研究が進展してい

る。(Mosselmams [2007]) このような絶対主義的な側面から、限界分析という均衡理論よりも、制度を重視した制度理論に重点を置く方向性を視座に置くとき、本論文の位置づけは、それとは距離を置くことは明白である。制度を強調するのではなく、むしろ時代的なインプリケーションをさらに深く、多様に求めることで、ジェヴォンズの相対性をより明確にしようとするからである。そして本論文で導出された結果は、経済理論のその後の発展における、理論と統計、演繹と帰納との共存関係を、ジェヴォンズが強く意識したことを示唆する。

今後の課題の幾つかについて、最後に触れておく。本論文でも少し触れたが法律学についてのジェヴォンズの考え方が彫琢されてはいない。さらに追跡的に帰納的統計的調査について、他文献をより多く考察する必要性がある。上に挙げたような制度的な分析をどのように評価すべきかについて、意見を提示していく必要がある。最後に、大陸経済学とジェヴォンズとの相互関係性について、考察を進めることである。

参考文献

- 阿部 [2005a]: 阿部秀二郎「ロッシヤーの歴史的方法—サヴィニーの影響—」,『経済理論』323, 和歌山大学経済学会
- 阿部 [2005b]: 阿部秀二郎「イギリス歴史学派の源流—メインへのサヴィニーの影響—」,『経済理論』327, 和歌山大学経済学会
- 阿部 [2006]: 阿部秀二郎「レズリーの変化—賃金基金説との関係—」,『経済理論』332, 和歌山大学経済学会
- Jevons [1834]: T. Jevons, *REMARKS ON CRIMINAL LAW; WITH A PLAN FOR AN IMPROVED SYSTEM AND OBSERVATIONS ON THE PREVENTION OF CRIME*, HAMILTON AND ADAMS AND CO. LONDON
- Jevons [1870]: W.S. Jevons, 'Economic Policy', *Essays in economic method* (R.L.Smyth ed.), Gerald Duckworth, London, 1962
- Jevons [1871]: W.S. Jevons, *THE THEORY OF POLITICAL ECONOMY 1st ed.* Verlag Wirtschaft und Finanzen GmbH, Düsseldorf, 1995
- Jevons [1875]: W. S. Jevons, *MONEY AND THE MECHANISM OF EXCHANGE*, HENRY S. KING & CO., LONDON
- Jevons [1876]: W.S. Jevons, 'THE FUTURE OF POLITICAL ECONOMY', in *THE*

- PRINCIPLES OF ECONOMICS* (ed. By HENRY HIGGS), Reprinted by AUGUSTUS M. KELLEY, NEW YORK, 1965
- Jevons [1877]: W.S. Jevons, *THE PRICIPLES OF SCIENCE 2nd ed. revised*, MACMILLAN AND CO. LONDON AND NEW YORK
- Jevons [1888]: W.S. Jevons, *THE THEORY OF POLITICAL ECONOMY 3d. ed.* Macmillan, London, 寺尾琢磨改訳『経済学の理論』日本経済評論社, 1981 年
- Jevons [1919]: W.S. Jevons, *Political Economy*, Reprinted by MACMILLAN AND CO., LIMITED, London
- Jevons [1965]: W.S. Jevons, *METHODS of SOCIAL REFORM*, Reprinted by AUGUSTUS M. KELLEY, NEW YORK
- Keynes [1986]: J.N.Keynes, *THE SCOPE AND METHOD OF POLITICAL ECONOMY 4th.ed.* Reprinted by AUGUSTUS M. KELLEY
- Leslie [1876]: T.E.C. Leslie, 'ON THE PHILOSOPHICAL METHOD OF POLITICAL ECONOMY', *ESSAYS IN POLITICAL ECONOMY*, AUGUSTUS M. KELLEY, New York, 1969, pp.163-190
- LAW TIMES [1868]: 'THE LIVERPOOL MOVEMENT', *LAW TIMES* (OCT. 3)
- Liebig [1863]: B. Liebig, 'Bacon as a Natural Philosopher', *MACMILLAN'S MAGAZINE VOL.VIII* (D. MASSON ed.), MACMILLAN AND CO., LONDON
- Maine [1914]: S.H.S. Maine, *LECTURES ON THE EARLY HISTORY OF INSTITUTIONS 3d. impression of the 7th.ed.* JOHN MURRY, London
- MOSELMANS [2007]: B.MOSELMANS, *WILLIAM STANLEY JEVONS AND THE CUTTING EDGE OF ECONOMICS*, Routledge, LONDON AND NEW YORK
- PC. I [1972]: R.D.C.BLACK ed. *Papers and Correspondence of WILLIAM STANLEY JEVONS Vol.I*, THE MACMILLAN PRESS LTD.
- PC. III [1977]: R.D.C.BLACK ed. *Papers and Correspondence of WILLIAM STANLEY JEVONS Vol.III*, THE MACMILLAN PRESS LTD.
- PC.VI [1977]: R.D.C.BLACK ed. *Papers and Correspondence of WILLIAM STANLEY JEVONS Vol.VI*, THE MACMILLAN PRESS LTD.
- Pearson [1997]: H. PEARSON, *Origins of Law and Economics-The Economists' New Science of Law, 1830-1930-*, CAMBRIDGE
- Rumble [1985]: W.E. Rumble, *The Thought of John Austin: Jurisprudence, Colonial Reform, and the British Constitution*, Athlone Press, London
- Stein [1980]: *LEGAL EVOLUTION: The story of an idea*, Cambridge University Press, 今野勉訳『法の進化—法と社会の関係史—』文眞堂, 1987 年
- 武居 [1980]: 武居良明「一九世紀イギリスのトラック制と家内労働の消滅: ミッドランドにおける一つの雇用関係」, 『社会経済史學』46 (3), 社会経済史学会
- 上宮 [2000]: 上宮正一郎「J.N. ケインズと経済学方法論」, 『国民経済雑誌』181 (6), 神戸大学経済経営学会